平成３０年１１月１日

あきる野市議会議長　殿

会 派 名　明るい未来を創る会
代 表 者　合 川　哲 夫　㊞

会派の（ 調査研究 ・研修 ）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

１　調査研究または研修実施日	平成３０年１０月１０日（水）から 平成３０年１０月１２日（金）まで　２泊３日
２　調査研究または研修の場所	１０日－新潟県燕市
	１１日－新潟県長岡市　全国都市問題会議
	１２日－新潟県長岡市　全国都市問題会議
３　調査研究事項または研修名	燕　市　つばめ若者会議について
	長岡市　全国都市問題会議「市民協働による公共の拠点づくり」について
	長岡市　同上
４　参加者氏名（５名）	清水晃、奥秋利郎、中村のりひと、村木英幸、合川哲夫
５　調査研究または研修の概要及び感想等	別紙のとおり

※ 自家用車又はレンタカーを使用した場合は、必ず自家用車・レンタカー使用報告書を添付してください。

受付
第　号
30.11.-1
あきる野市議会

1日目

燕市　１０月１０日　午後１時３０分　～　同３時３０分
燕市の概要
　人口　　８０９０９人
　面積　　１１０．９６平方キロメートル
沿革
　燕市は、代表される信濃川をはじめ、中ノ口川、西川の水利を利用した米作りが盛んで、舟運を利用したコメや物資の集積地として栄えた。
　前述の川の氾濫により、度々大きな被害に遭い、明治初期から開始した分水工事が中断されていたが、再び着手され昭和６年に「大河津分水路」が完成し、湿田地帯だった越後平野の乾田化が進み、豊かな穀倉地帯が誕生した。
　一方、江戸時代初期に水害により困窮した農民の副業として、和釘、銅器、ヤスリ、キセル、矢立などに技術が広がったが、道具は需要が減り、大正時代から当地域の産業は金属洋食器、さらに昭和に入り金属ハウスウェア製品の製造が活発化し、現在では優秀な金属加工の技術を活かし、様々な分野で多角化や高付加価値化の取り組みも進められている。

視察内容

つばめ若者会議
　燕市では、各種審議会や委員会への若者の参画がなく、若者の声が街づくりに生かされておらず、市民アンケートでも３９歳以下のまちづくり満足度が「どちらでもない」が多い状況であった。
　そこで、若者をターゲットにしぼった、若者だけで語り合う場『つばめ若者会議』を立ち上げることになった
『つばめ若者会議』は「若者自らが暮らし、そして子供たちに引き継ぎたい２０年後の燕市はどんな町がよいか？」を語り合い、その実現のために行動していく若者によるまちづくりの場である。そして２０１３年６月３０日に『つばめ若者会議』がスタートした。

まず、会議の目標を４つ立てた。
①理想とする２０年後の燕市の将来像『未来ビジョン』の策定
②ビジョンを実現するための行動計画『アクションプラン』策定
③次世代リーダー、まちづくりの担い手
④会議に参画する若者同士の協働の推進（若者会議を継続開催する仕組みづくり）
　この４つの目標の意味合いについては、
『２０年後』
　いまの子供たちが、現メンバーと同じ２０代～３０代になるころで、子供たちにより良い未来の燕市をバトンタッチするスパンとしている。
『未来ビジョン』／『アクションプラン』
　未来の実現に向けて共有していけるものとして、計画書などのような印刷物にこだわらず、「自分たちがやるんだ」と言う主体的な内容のものとなるよう考えた。
　こうしたことを基本として取り組んで来た。

こうして４つの目標とそれに向かって行動をするためにエンジョイのエンを燕の文字を当て「燕ジョイ活動部」を組織した。

これには社会人はもとより高校生、大学生等の積極性や自由な発想を大切にし、自分たちが楽しいと感じるまちづくり活動に取り組んでもらい、１６歳から２９歳の若者で出身地域は問わない、活動期間は２年間、（対象年齢であれば継続可能）とした。

活動内容は、具体的に決まっていない、メンバーの「ノリ」から生まれた新たな何かを創出し稼働をする、全く自由で開かれた組織である。

この組織が、イベントに参加する、ただの参加でなく、既存のお菓子屋さん、またはラーメン屋さんとか、協同で新商品を開発し、それをもって参加し人気を博す。

また空き商店を自分たちでリニューアルして、まち中の賑わいを取り戻すなど、これらはほんの一例で、５０数名のメンバーの中からアイディアが生まれそれを実践していく、市側では一切口を出さず、必要最小限の資金を補助するのみで、補助金は２０１３年の立ち上がり時期に比べ２０１７年では１１％強の９１４，０００円にまで下がってきている、この例をとってみても、組織の自主性を尊重し成果をあげていることの証ではないかと思われる。

感　想

雪国の地方都市の若者が集い自分たちの街を楽しい明るい街にしていこうとする強い郷土愛が地域との連携も模索しながら、若者が自由な発想と、組織の将来をしっかりと見据えながら、事業をつなげていくことを実践していることに好印象を持った。

我があきる野市でも五日市商店街の活性化委員会を立ち上げているが、幅ひろい年代層から、他地域から、または女性の参加もあっていいのではないかと感じた。

議場内の写真

２日目、３日目

長岡市　全国都市問題会議参加

市の概要

人口　　２７２，８８２人

面積　　８９０．９平方キロメートル

日本では一番長い川、信濃川が市域中央部を流れ日本海に流れる。

戊辰戦争より１５０年、さきの戦争での空襲と２度の戦禍と数度にわたる大地震に見舞われながらも、その都度長岡のまちは「米百表」の精神を受け継ぐ市民の力で復興を成し遂げてきた

都市問題会議　今回の課題は『市民協働の公共の拠点づくり』

全国市長会主催のこのイベントは毎年開かれ、今年で８０回を迎え全国から２，０００名の市長や議員が集まる大きな大会であるが、少し形骸化している感があり、我が会派では３～４年は不参加でいたが、今年は、前回視察の燕市が豪雪の為、やむなく中止をしたため、本大会に合わせて燕市を訪問したものである。

大会初日には、会長の相馬市長の挨拶、地元長岡市長、新潟県知事の挨拶が終わると、基調講演では「地方分権へのまなざし」のテーマで　・本郷和人東京大学資料編纂所教授の講演、続いて主報告で「長岡市の市民協働」のテーマで、地元 磯田達伸長岡市長の報告があり、午前中は終わり、午後より一般報告で、「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」のテーマで三重県津市長・前葉泰幸市長のお話は、情報の見える化での中身に引き付けられ、前葉市長の市長としての、一つの生き方を見た感じがした。

この点を考慮して、中村のりひと議員に寄稿して戴いた。

建築家で東京大学教授・隈研吾氏の報告で初日は終了する。

本会場は市役所と大規模なイベント会場を併せ持った素晴らしい施設であり、氏の設計思想がよく表れている施設と感じ、感想文を村木英幸議員に寄せて頂いた。

１日目はこれで終了し２日目は、本課題のテーマに基づきパネルディスカッションを１１時５０分までに終了し、閉会式を行い全ての項目を終了した。

以下感想文

津市　前葉泰幸市長報告

テーマ「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」

中村のりひと報告

津市長の話は本当に素晴らしかった。これこそがリーダーシップであり、首長であると思った。市民に対しての姿勢が非常に明確だった。「全ての情報をオープンにして、とことん議論を市民とする。」「オープンにすると意見が出てくる。」「行政が一番情報をもっている。」他にも様々に琴線に触れる言葉がありました。情報公開や説明責任と口ではいう首長が多いが、それに実際に実行している方は数少ない。

オーナーは市民であることをよく理解をされているからこそ、情報をオープンにするのでしょう。

当市においても、今後のますますの少子化の中で、公共施設を利用するのも今の市民とこれからの市民、その辺りをしっかりと考えた公共施設等総合管理計画を進めていかなければならない。

当市も徹底的な情報公開、情報共有をオーナーである市民に対して行わなければならないことを強く感じた。

中村のりひと記

建築家　東京大学教授　隈　研吾氏

テーマ「場所の流れ」　　村木英幸報告

長岡市における市役所のまちなか移転と中心市街地のまちづくり、と言うことを前面に出し、本会場にもなった「アオーレ長岡」は屋根付き広場を中心に、アリーナ、市民交流スペース、市役所、市議会が一体となった公共施設である。

建物の壁や通路デッキには新潟産木材の板を使用して凹凸をつけ、モザイク模様のようにも見える。また議会棟も屋根付き広場に面した１階に配置されて、大きな窓越しに広場が見える。市民に開かれた議会を目標としている。

議会棟内も、壁に地域産材の板で装飾されて森の中にいるような感覚がした。夜にも見学に行ったところ市民の講座が開かれていた。

アリーナデッキでは高校生のグループや男女が集まっていた。

コンビニエンスストアがテナントとして入っているのは驚いた。

あきる野市の中心市街地づくり、活性化の為にも参考となり、良い講演であった。

村木　英幸記

会場ロビーの写真

会場正面に映し出された大会映像